

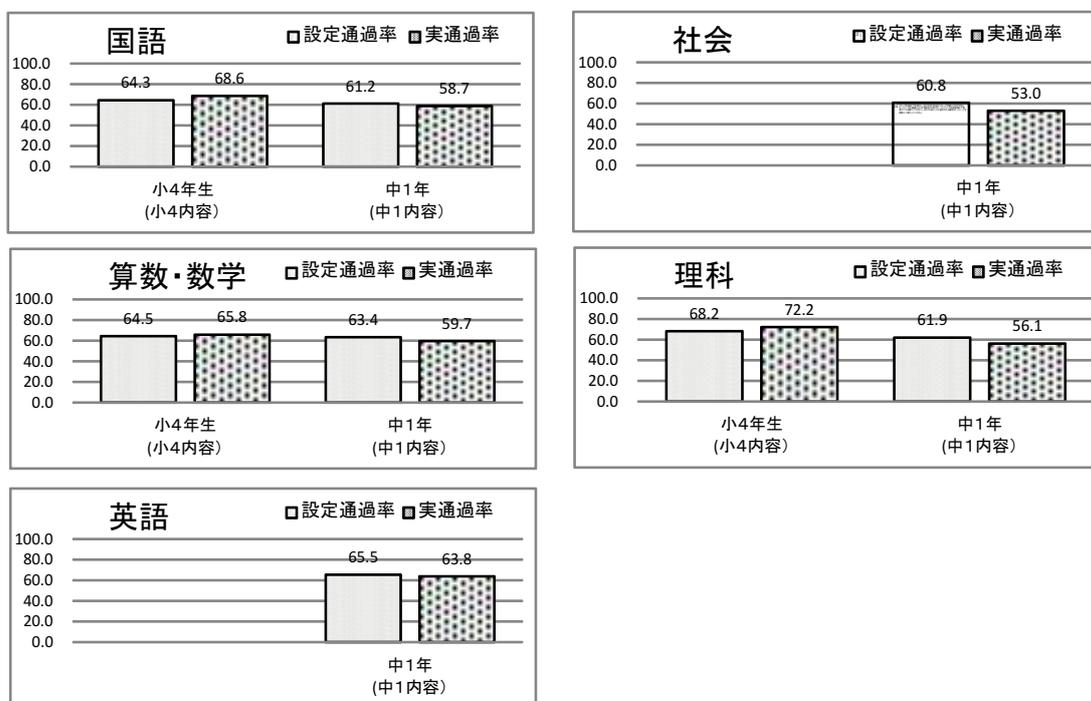
V 全体のまとめ

1 明らかになったこと

本テストは、佐伯市の児童生徒一人一人の学習習熟度の把握を行うとともに、80%以上の児童生徒が評価規準を達成できるよう学習指導法の工夫改善を図る目的で実施した。テスト結果全体及び生活実態アンケート調査の分析から明らかになったことを記述する。

(1) 各教科の全体的な達成度の判断について

各教科の達成度の判断については、「各教科の平均値（実通過率の平均）－目標値（設定通過率の平均） ≥ -5 になった場合、達成度は『おおむね良好』とする。」との判断基準を設定した。



<小学校>

学年	教科	設定通過率	実通過率	良好
4年 (小4内容)	国語	64.3	68.6	○
	算数	64.5	65.8	○
	理科	68.2	72.2	○

※○印がついている教科が「おおむね良好」と判断できる教科

<中学校>

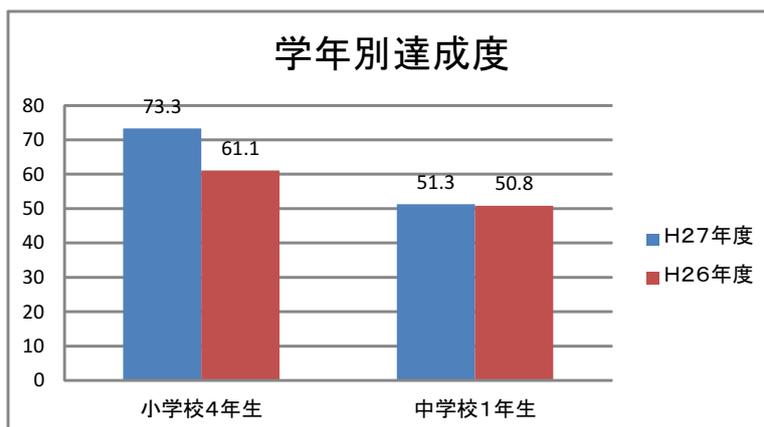
学年	教科	設定通過率	実通過率	良好
1年 (中1内容)	国語	61.2	58.7	○
	社会	60.8	53.0	
	数学	63.4	59.7	○
	理科	61.9	56.1	
	英語	65.5	63.8	○

※○印がついている教科が「おおむね良好」と判断できる教科

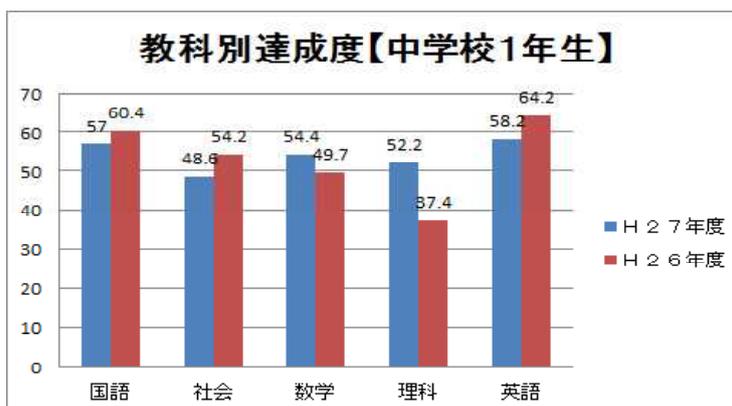
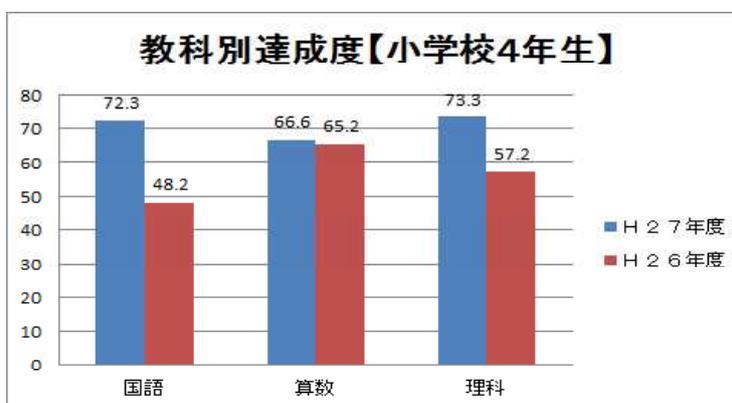
(2) 児童生徒の評価規準（目標値）の達成状況について

各教科の目標値（設定通過率の平均）やその合計に対して、「設定通過率を上回ると考えられる」もしくは「設定通過率と同程度と考えられる」児童生徒の割合が80%以上となった場合、学年における達成の度合いは「評価規準を達成した」とする判断基準を設定した。

- ① 学年別達成度 … 教科合計の目標値(各教科の設定通過率の合計)を「上回る」「同程度」と考えられる児童生徒の割合(%)



- ② 教科別達成度 … 各教科の目標値（設定通過率の平均）を「上回る」「同程度」と考えられる教科別児童生徒の割合(%)



平成24年度から、当該年度の12月までの学習内容を範囲としてテストを行ってきた。昨年度より、対象学年を小学校4年生と中学校1年生とし、小学校では社会を除く3教科、中学校では5教科で実施している。

各教科の実通過率と設定通過率を比較した「各教科の全体的な達成度の判断」については、小学校では国語、算数、理科すべてが「おおむね良好」となった。昨年度は国語が達成できていなかったが、今回は4.3ポイント上回る結果となった。

中学校1年では社会、理科を除く3教科で「おおむね良好」となった。社会では実通過率が設定通過率を7.8ポイント、理科では5.8ポイント下回る結果となった。

次に、全教科合計の実通過率と設定通過率を比較した「学年別達成度」については、小学校4年では73.3%の児童が、中学校1年では51.3%の生徒が、各教科の設定通過率の合計（学年の目標値）を「上回る」または「同程度」となった。小学校4年については、昨年度から12ポイントほど上昇した。

また、各教科の設定通過率を「上回る」か「同程度」と見られる児童生徒の割合を見る「教科別達成度」が80%（市が目標としている数値）を超えた教科はなかったが、小学校の国語と理科においては、70%を超えており、目標に近づくことができた。中学校ではいずれの教科においても60%を下回る結果となった。

これからの指導の在り方としては、与えられた情報から必要な情報を選択し、適切にとらえ、学習した用語等を用いて説明したり、理由を述べたりする指導を行うことや、調べたことや考えたことを文章で表したり、授業の最後に、この時間で学んだことを振り返ったりする活動の充実が求められる。

また、児童生徒アンケートの結果より、「自分のよいところがまったく言えない」、「友だちから信頼されていると思えない」と回答した割合が増加していることや、他の質問項目においても否定的な回答が増加傾向であることが明らかとなった。

これらのことより、「学びに向かう力」の育成が重要であると考え。自分の気持ちを相手に伝えることや相手の意見を聞くこと、物事に挑戦しようとするなど、「意欲・集中力・持続力・協働する力」等を身に付けることができるよう、生徒指導の3機能を意識した問題解決的な授業を充実させていかなければならない。

そのためにも、主体的・協働的な学び（アクティブ・ラーニング）の実現を目指して平成27年9月に示した、『「新大分スタンダード」に基づく「今後の学力向上に関する取組の徹底（改訂版）」』を踏まえた取組を各校において充実させていく必要がある。